

## 寄書

蠅

竹内徹太郎

仰向に寝轉んで窓越しにぼんやりと空を見つめて居た。大きい鳥が一羽自分の見て居る空を横ぎつて大いへん早く飛んだ。よく見ると其鳥は窓の内を飛んだのであつた。其鳥は蠅であつた、暫くして其蠅ではあるまいがいやな羽音をして頭のまはりを廻つて居る。手を舉げて追はふとしたとたんに其蠅は頭のまはりではなくて向ふの空で凧がうなつて居るのであつた事が分つた。こんな同じやうなことが二度も續けざまにあつたので僕はつづく考へた——スケッチする時にこんな風に蠅を大きい鳥と見てそれが蠅であることが分らぬ内に其儘繪に描き下すことはあるまいか——無理に鳥でなくとも、木でも、山でも、また位置でも。——遠近の間違や調和のない繪が出来るのもこんな具合であらう。即ち其時の目が、また頭がぼけて居るのだ。氣がおちついて居ないのだ。其物に一心でないのだ。親切でないのだ。

## 寝前小言

京城 横田塔村生

○去る六月二十二日は大英國皇帝の戴冠式にして、倫敦人の夢想して居りし盛大なる祝、それは一大偉觀を呈せりとは新聞紙上にありし如く、我が朝鮮の古都にありても同盟國の帝王戴冠式なりとて、小學校生徒等の提灯行列は無邪氣に國歌を唄ひつ

、英國領事館に入れり。又朝鮮人の行列もありて日出度祝日を送りたり。

○大坂毎日新聞一万號附録として、吉田博氏の『初夏の富士』あり、余はいままでかゝる大なる繪に接したる事なく、繪は好きにても諸先生の肉筆物はいまだ一度たりとて見たるとなく、只小なる石版畫を見、寫眞版木版を見たる外なかりき、石版ともかゝる大作は初めてである。

○彼の富士の繪は『初夏の富士』と云ふよりも『富士の夕』とした方が畫題に適して居らむ、田子の浦より見たりとすれば、前面の松林は感じが薄い、然し富士は好く出來居たり、正に夕陽の没せんとして半天を紅に染めたる處、カラーは富士の景としては好く現はれ居れり。

○余は幼少の時より富士を愛したり、又山岳を愛しぬ、余の家の藏に應擧の走り書きの富士あり、其れに水戸志士の筆蹟ありたり、我家の祖は豪農にして、好く書畫を藏し、庭を作りなどして喜び居れり、然れども父の世に家財散じて古書畫まで賣られ、たゞ一つ彼の應擧の富士ありしなり、然し眞筆なるや否や不明なり。

○余は富士を愛す、余は洋畫日本畫寫眞木版の富士畫を集めて見しに、十五才の春より十九才の春までの内に新聞雜誌より切り取りしもの二百八十一枚、名々に趣きを異にし、皆好く作者の感じを現はせり。諸君此んな事はつまらぬ事であらんが、二三年も貯へて後ち見るのは實に面白い、アルパムにでもさして